

一足の草鞋 小池光

京都大学教授で人文科学研究所所長も務めた桑原武夫は、専門のフランス文学だけでなく、まことに広範に文化全般に渡って発言した。ルソーや中江兆民のアカデミック・プロデューサーとして画期的な成果を挙げつつ、国語問題にもどしどし自説を主張し、短歌や俳句を一刀両断に裁断した戦後の「第二芸術論」では、俳人歌人の顔色をなからしめた。また京大山岳部の出身の赫々たる登山家でもあって、ヒマラヤのチョゴリザ峰に日本隊が初登頂したときはその隊長として活躍した。さまざまな知と行動の分野を自在に飛び回った戦後第一級の知識人である。

その桑原武夫があるときこう言ったと伝えられる。「二足の草鞋くらい、履けなくてどうする」と。

二足の草鞋を履く、という成語は、肯定的に用いられる場合もないではないが、まづおおよそは否定的ニュアンスを伴っている。二足の草鞋を履いてはどちらも大成しない、人間はそれぞれ与えられたひとつの道を黙々と粛々と歩んでこそ尊敬される。まっとうな人間は二足の草鞋など履くべきではない、というのが社会全体の暗黙のコンセンサスであった。

桑原武夫はこのコンセンサスを、いかに合理的近代主義者らしい明晰さで、ひっくり返した。それが「二足の草鞋くらい、

履けないでどうする」という挑発的言辞である。じつさい彼が履いた草鞋は二足にとどまらず、三足、四足の草鞋はいつもその腰にぶらさがっていたらう。「専門意識」などなんのその、その知的好奇心の赴くままにどこへでも出掛けて行った精神ののびやかさには、自立した個人の闊達な精神と肉体を最高の価値とする近代主義者の面目が躍如としている。

しかし、桑原武夫のこの言は当時の社会では必ずしも受け入れられたとは言いがたい。当時というのは今から四十年、五十年の前の頃である。むしろ、二足の草鞋を履けることをひけらかすイヤミな部分（それもなくはない）に反応した。人々は二足の草鞋どころか、いつそう一足の草鞋の城に立てこもり、その一足の草鞋をそれぞれの場所ですり切れるまで一心に履いて、戦後復興を遂げ、高度成長を経て欧米の生活水準に追いつくこの安定した繁栄する社会を作り上げてきたのである。

しかし、いま社会の様相は明らかに別なものになっていく。社会全体がひとつの明快な到達目標を持つとき、一足の草鞋というモラルは有効である。なにより社会全体の馬力を生む、実践的なモラルであったろう。だが、今日の日本はそういう社会ではなくなつた。単線的目標設定の時代は終わり、もつと複雑で複線的な生き方が求められる。終身雇用制が通用しなくなりつつあり、絶えず「リストラ」の危機があり、転職することもごく普通になりつつある。加えて前代未聞の高齡化社会が訪れようとし

ている。定年後の長い長い時間をいつたいどうやって過ごせばいいのか、呆然とするだけで誰も指針を与えてくれない。

こういふとき桑原武夫の前言は、まことに実際のな意味を持つ。ことば通りの「二足の草鞋くらい、履けなくてどうする」時代が、いつのまにかやってきていたのであつた。それは学問領域の垣根を自由に行き来することに止まらず、個々の人間の、実際的な現実的な生き方の問題としてまさにそうなのである。どんな職業の、どんな人間であれ、生きていくためにはこれからは草鞋は最低二足が必要なことを、できれば三足くらいは持つていた方がいいことを、いま身に沁みてわれわれは知りつつあるのではないだろうか。

さて本著の著者は、大学の工学部で応用化学を専攻した人である。長く工業化学のエンジニアとして、企業の第一線で研究、活動してきた。文学の実作は高校時代かららしいが、企業人として縦横に活動していたときには鎮めていた文学の若々しい情熱を、しかるべき人生の節目に立って、こうして再燃させようとする生き方に、まづ共感の拍手を送りたい。しかもその作物は俳句、短歌ならいざ知らず、小説である。小説について何の経験もわたしにはないが、はるかに蓄積と根気と構想力、つまり腕力がある作業であることは容易に想像がつく。それはみずから履く草鞋を、まづみずから編み上げる作業にも似ている。「二足の草鞋くらい、履けなくてどうする」という設問に対する端的な実践例として、著者の

生き方は切実な今日の意味と共感を十分に持っているといえるだろう。

ペルーの小説家バルガスリヨサは、あるところで「あらゆる物語は、すべてそれを創造する人の経験が根にあつて生まれてきます」と語っている。本著に収録された二篇を読めば著者がどういう経験を経てきたか、その多彩さに誰もがうらやむ感情を押さえきれないはずである。

ダンスやジャズは、小説のために取材された知識でなく、著者の経験と体験がありていよいよ青春の軌跡のごときものが、ぎつしり詰った革袋であるに違いない。そのディテールは体験した人間でなければわからない臨場感に富み、生き生きとした精彩を放つて読者を引き込む。理系の人間が文系の小説を書くという二足の草鞋に止まらず、ジャズミュージシャンでもありダンスの愛好家でもある。また本文中に散りばめられた俳句や短歌を見れば、わが国の伝統的小詩型にも興味と関心を有している。世の中にはかくも複数の草鞋を生き生きと履いてきた人がいるのである。

その向こうにあるものは、単に興味の多彩さを誇るディレタントイズムではなく、もっとひりひりした人間の全体性の回復を希求する切実なところであろう。昔の人々、とりわけ明治時代などにあつて、森鷗外、夏目漱石に限らずまた正岡子規をあげるまでもなく、複数の草鞋を履くことはけっして例外的な姿ではなかつ

たことを思い出さなければならぬ。貪欲でおそれを知らない「アマチュア」の精神と行動力が日本の近代を創り上げてきたのであつた。著者はまた歴史への関心ふかく、本著の小説は時に歴史記述のタツチを纏うが、そのことは決して偶然の所産とは思われない。

ともあれいくつかの偶然によつて、紹介のための小文を記す。著者のこれからの生き方にいつそうの声援を送りたいし、またこの本を開く未知の読者各位にも同じ声援を送りたいと願っている。

面談余話

一 不思議な縁、重なつた偶然

小池光先生が序文で「いくつかの偶然によつて」と述べていますが、私が原稿依頼で御眼に掛かつた折もこの不思議な縁を感じました。

母校新潟大学工学部八十周年記念式典における氏の基調講演「科学のことは詩のことは」に感銘し、それが機縁となつたのは事実です。母校に二人の長谷川教授がいます。学長の長谷川彰氏と前工学部長の長谷川富市氏です。小池氏は、実は東北大で彰氏の物理の教え子で、富市氏とは結社「短歌人」の同人仲間なのです。氏が教鞭を執る私立高校の大内誠副校長と私は遊び仲間です。私が所属した俳句結社「岳」の師系は主宰藤田湘子の「鷹」です。「岳」主宰宮坂静生は「澤」主宰小澤實と「鷹」の兄弟弟子です。小池氏もまた「鷹」「澤」と気脈を通じ親交厚いことが面談の中で判明したからです。

「小池 光 プロフィール」

略歴

昭和四十六年三月 東北大学物理学科卒業
昭和四十八年三月 同大学院修士課程

(専攻:物性物理) 修了

昭和五十年三月 私立浦和実業学園高等学校教諭
現在に至る

受賞歴等

昭和四十七年頃 作歌始める 結社「短歌人」入会
現在に至る 現在同誌編集人

昭和五十二年 歌集「バルサの翼」によつて

第29回現代歌人協会賞受賞

平成八年 歌集「草の庭」によつて

第1回寺山修司短歌賞受賞

平成十四年 歌集「静物」によつて

第48回芸術選奨文部科学大臣新人賞

その他歌集「日々の思い出」「廃駅」

エッセイ集「街角の事物たち」「現代歌まくら」

「短歌/物体のある風景」

対談集に「茂吉の迷宮」等

短歌のみならず短詩系文学の俳句界との人脈も

広く、特に俳句結社「鷹」(主宰:藤田湘子)「澤」

(主宰:小澤實)との親交は厚い

歌人としての要職

現代歌人協合理事 NHK歌壇 角川短歌 山陽

新聞 北国新聞等の各選者を務める

父は第八回直木賞作家の大池唯雄(本名小池忠雄)

宮城県柴田町出身 現在埼玉県蓮田市在住